

東北復興支援特別企画「棟方志功展祈りと旅」展のギャラリートークがありました。

この日は夜間開館（午後8時まで）のある日なので、夕方6時30分から40分ほど担当の学芸員が会場で主な作品（残念ながらすべてではありませんが）についてのお話をするものです。

企画展のときはいつも会期中に数回開いています。



写真のようにこの日は、大変多くの聴衆が来られました。あまりたくさんで話をしている担当学芸員が見えないくらいです。彼がロビーに出る前から、このギャラリートークを目当ての方が何人も待たれていました。たいへんありがたいことで、話す方も力が入ります。最後に拍手までいただきました。

この展覧会中のこのあとのギャラリートークは、8月6日と20日の土曜日それぞれ午前11時からありますので、ぜひお越しください。



ついでながら棟方志功のことで、つい最近知ったことをお伝えします。

棟方好きはご存知のことかもしれませんが、棟方を「世界のムナカタ」と呼ばれるようになったきっかけとなったサンパウロ・ビエンナーレ(1955)とヴェネチア・ヴィエンナーレ(1956)の両方に出品された《二菩薩釈迦十大弟子》の版木のことで、そう版画を刷るために彫られた板のことなんです。この作品はビエンナーレに出品された戦後に彫られたものではなく、戦前に作られたものでした。東京の代々木山谷に住んでいた棟方家は昭和20年3月の末に戦火を避けるために富山県福光町に疎開しました。しかし、彫られた版木も含めてすべての家財を残したままでした。志功の妻チヤは一旦福光町を後にして東京へ戻り、一ヶ月以上も荷物の梱包や発送の手配をしたそうです。5月になってもなかなか戻らない妻に志功は長文の手紙で、自分も子供たちも待っているのだから福光町にはやく来るように書き送りました。それに促されて妻が東京を後にしたのは5月24日でした。その翌日25日は東京に大規模な空襲があり、棟方の家も防空壕に入れてあった版木や作品も燃えてしまったそうです。



↑ 《二菩薩釈迦十大弟子》

送り出した荷物も大半がまだ駅にあって燃えてしまったということです。120 個ほど送ったうちでかろうじて 20 個近くだけは無事に福光町に届きました。その中に志功が大切にしていたイギリス製の椅子があり、その椅子を梱包していたのがなんとあの釈迦十大弟子の版木だったのです。二菩薩の版木のほうは燃えたのですが、偶然の事ながら先に発送した椅子とその梱包材となっていた十大弟子の版木は無事でした。このことが戦後の棟方の活躍につながったということもいえそうですね。

戦渦を生き延びた作品が今こうして愛知県美術館の展示室で見られるというわけです。

(S. T.)